



福  
井  
貞  
子

絵  
絣<sup>がすり</sup>  
展

— 藍に生きて —

福  
井  
貞  
子

絵  
絣  
展

— 藍に生きて —

## ごあいさつ

日本女子大学成瀬記念館では、造形芸術の分野で活躍する本学卒業生を紹介する企画展示シリーズ“創る”を行なっています。このたび、シリーズ“創る”(6)として、「藍に生きて——福井 貞子 絵絣展」を開催することとなりました。

福井氏は1932(昭和7)年、鳥取県に生まれ、1952年に結婚。農家の嫁として農作業に従事するなか、1960年に鳥取県立保育専門学院実習助手となったのを第一歩として、1961年9月に倉吉北高等学校講師、翌年教諭となり、教育に携わります。その間、本学通信教育部生活芸術科(現在の家政学部通信教育課程生活芸術学科)に学び、1962年に卒業しました。

絵絣との出会いは、夫の祖母にあたる倉吉絣の織り人、福井かね氏から、当時すでに存亡の危機にあった倉吉絣の手ほどきを受けた1959(昭和34)年に遡ります。絣織りの技術の習得にとどまらず、福井氏は古老たちへの聞き取り調査、地元倉吉に限らず、各地の絣文化の調査、古布の収集、絣の歴史や経済的、社会的背景の研究を続け、数々の著書にまとめました。また、収集した資料を公開するため、1979(昭和54)年には、自宅の敷地に倉吉絣資料館を開設しています。倉吉絣の技術の継承・普及にも取り組み、倉吉絣保存会設立に絣指導者として参画、2002(平成14)年から2006年には会長を務め、現在も顧問として後継者の育成に努めています。

一方、倉吉絣の美への探求にも情熱を傾け、鳥取の美しい自然に取材したオリジナルのデザインを次々と生み出してきました。きらきら光る波や茜色に染まる海、砂丘の風紋といった自然が生み出す一瞬の美を絣の模様には織り込んでいきます。自ら綿や藍を栽培し、糸を紡ぎ、藍を建て、木の根や木の皮、栗やくちなし、ざくろなど自然の恵みを利用した草木染めに色の可能性を追求しています。

半世紀にわたる研究と創作の日々の中から生み出された美しい絣の色と文様をご堪能ください。

日本女子大学成瀬記念館

## ごあいさつ

このたび日本女子大学成瀬記念館での展示公開にお招き頂き、たいへん名誉なことと感謝しております。

私は木綿絣を追っかけ導かれて50余年の歳月を過ごし、いまだ歳月を忘れて夢中になる日々です。

木綿絣の歴史は長く、奥深く知れば知るほど興味が増し（草木や藍染め、素材の手紡、絣技法、文様、女性労働と木綿の野良着）研究分野が広がり一生の課題となりました。

木綿織物は400年の歴史があり、農家は織物によって経済的基礎を作りました。私は数知れぬ老女等を取材し織り秘法を教わり木綿衣料を託されました。さらに布を通して受け継がれた文化、勤勉な創作意欲、愛情、人間の倫理感、平和を尊ぶ生き方を学びました。こうした女性の知恵の蓄積と哀史による木綿織物（絣）と経済力を発掘しながら絣行脚し、その証言を忠実に収録して木綿の歴史を追い、絣の力強い文化の厚みを文字に記述して木綿の尊さを世に伝えてきました。

伝統ある絣の指導と支援は、県、市の行政やマスコミ、倉吉北高等学校絣研究室、郷土の方の励ましがあったからできたことと感謝しています。

私は倉吉絣保存会員と共に絣の再興を願って機織りを学び伝承しています。収集絣は私設絣資料館（1979～）で公開し、布に心を宿した絵絣、先人の働きに光を当てています。

今後、信ずる道「経糸より直（すぐ）いものはない」と教えた先人の学んだ道に向って純粋な心で仲間を大切に、絣文化の恩恵に感謝して緯糸を紡ぐ人生でありたい。また、伝統的技術を駆使する中で感動したことをスケッチして自己表現絣に向って精進を続けたいと念じています。

福井貞子

## 福井貞子作品展によせて

この度、福井貞子さんの作品展が母校である日本女子大学成瀬記念館で開催されますことを、心からお慶び申し上げます。

計らずも今年は福井さんが80歳の傘寿を迎えられた年と重なり、また織の上でも婚家の大姑から絣織の手ほどきを受けられてから半世紀を超える節目の年に当たるとお聞きします。そのような折に母校での展覧会を迎えられたのも御縁でしょうか。

福井貞子さんは、今日でこそ日本工芸会の染織作家として知られておりますが、長年にわたる倉吉北高等学校における教育者、私設の「絣舎」を開館された絣のコレクター、また『倉吉絣』『木綿口伝』など倉吉絣にまつわる多くの著書を記された染織研究家など、いくつもの顔をもたれて活躍されてきた方です。そしてその多岐にわたる活躍に一貫して流れているものが「倉吉絣」でした。

その長年の地道で堅実な活動により平成17年に第25回伝統文化ポラ賞（地域賞）を受賞され、それに次いで鳥取県絣無形文化財保持者、鳥取県文化功労者、昨年秋には文部科学大臣賞（地域文化染織の普及）の荣誉に輝き、その功績は全国に知られるところとなりました。

本学の家政学部賞は平成21年に受賞され、その際の講演会で「私の研究の基礎となった絣文様の分類方法、織物口伝の聞き書きの整理、そして私の生き方そのものは日本女子大学通信教育課程で得た学びにあり、成瀬仁蔵先生の教えにあります」と語られた言葉は、今も鮮明に私の記憶に残っています。

福井さんが織られる木綿絣は、機台に掛ける前に織物の経糸、緯糸の一部を文様に従って糸で括り、防染して染め、その斑に染上がった糸を使って文様を織り表わすものです。この絣織には絣を括る作業は大変でも機は最も簡単な平織が織れる装置があれば文様を表現できるという利点があります。したがって農家の副業として昭和の前半までは各地方にまだまだ多くの機が残っていたものです。しかし第二次世界大戦後、生活様式が大きく様変わりし、機械化・工

業化が躍進し、更に高度経済成長期を迎えるにあたって地方の手機は瞬くうちに廃棄されていきました。そうした時代に遭遇され、郷土の織物を守り通すことに一生をかけられたのが福井貞子さんでした。

また木綿の綿から手紡ぎで糸を採る人がほとんどいなくなった昨今、自ら紡いだ糸にこだわる福井さんは、ご自分の作品に「木綿緋」ではなく「木綿手紡緋」の名称を当てられています。白い綿花だけではなく茶色の綿花、さらに最近では淡緑の綿花も栽培されて作品に彩りを加え、藍染もまた天然の藍をご自宅で建てられる。福井さんの作品にある大地のぬくもりは、こうした一貫した手紡ぎ手織りの作業から生まれたものです。

今回の展覧会には、福井貞子さんが自ら選ばれた初期の作品から現在の作品まで、いわば福井さんの緋織の軌跡が窺える内容になっています。特に倉吉緋の伝統に忠実に斉一な文様を着尺に織りあげられた初期の作品と、平成に入って伝統工芸展で活躍され始めてからの作品とが対照的に一堂に会されます。作家として何を表現するべきか。その答えは作品に端的に表わされたように山陰の風土でした。砂丘や浜辺の波や鳥といったテーマが、手紡ぎの素朴で強靱な綿糸と天然の色に支えられて素直に表現された緋文様。それが福井貞子の「木綿手紡緋」であると言えます。

小笠原小枝（おがさわらさえ）  
日本女子大学名誉教授



1 「秋の渚」 1981年  
第29回日本伝統工芸展 初入選



2 「冬景」 1996年





3 「砂丘の風紋」 1997年  
第22回全国伝統的工芸展 染織グランプリ



4 「彩流」 2000年  
第37回日本伝統工芸染織展



5 「浜辺」 2003年  
第46回日本伝統工芸中国支部展 特別賞「金重陶陽賞」



6 「赤米の野」 2006年  
第53回日本伝統工芸展



7 「列砂丘」 2007年  
第54回日本伝統工芸展



8 「弁柄のさと その2」 2007年  
日本工芸会中国支部50周年記念展 鳥取県知事賞



9 「山桃」 2009年  
第52回日本伝統工芸中国支部展



10 「渚」2009年  
第56回日本伝統工芸展





11 「夕焼」2009年  
第43回日本伝統工芸染織展



12 「湖畔」 2010年  
第57回日本伝統工芸展

13 「前進」 1989年(左) / 14 「うず潮」 1990年



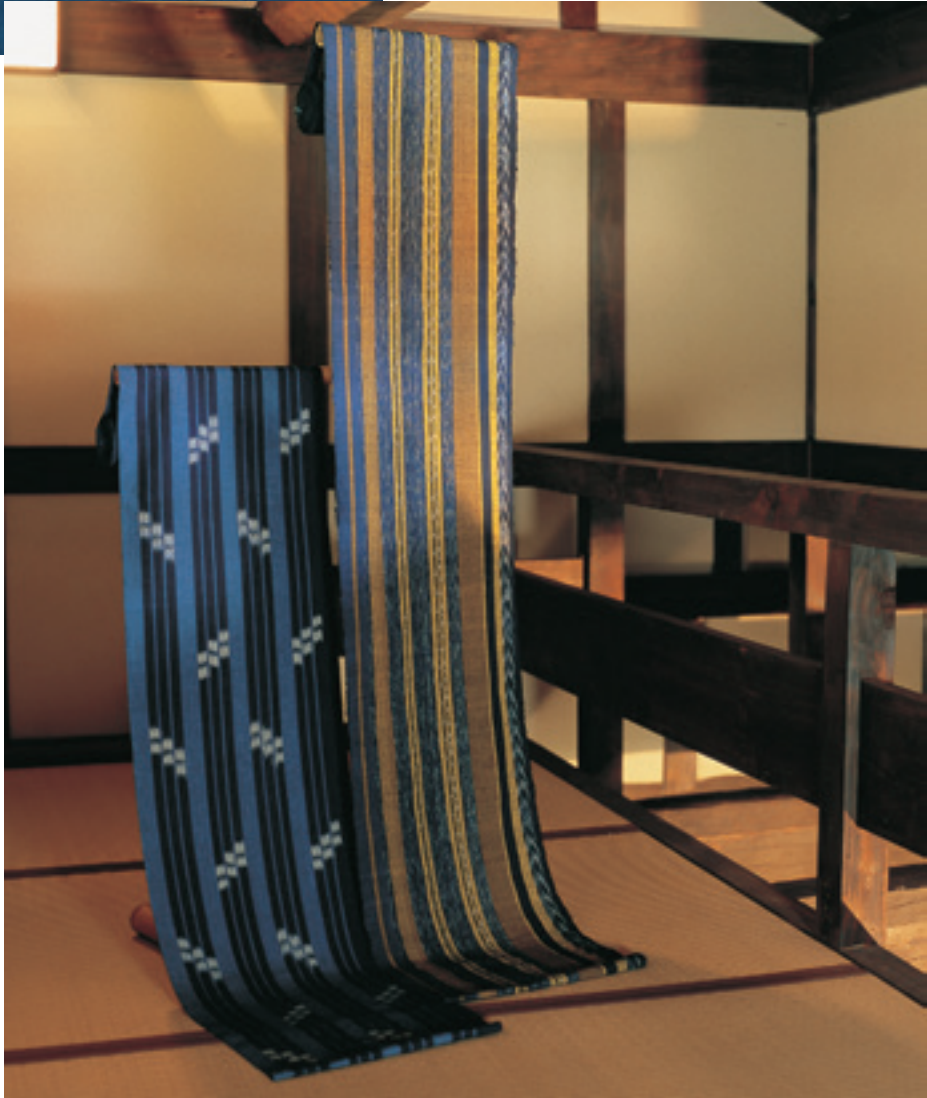
16 「経絣」 1975年頃 / 17 「矢絣」 1991年



15 「立涌と菊花」 1986年



18 「鶴」 1970年



20 「水のほとり」 1984年(左) / 21 「晩秋」 1966年



19 「親子亀」 1972年頃



23 「飛鶴文」 1994年(左)  
24 「紅葉と市松菱」 1989年

22 「豆腐文」 1985年



25

「矢絰」

1991年／26

「小絰」

1996年

22





27 「並んで」 1983年(左)

28 「希望」 1986年



29 「小絣」 2000年





31 「春風」 1998年(左)

32 「古代米の贈物」 1991年



30 「三角四角」 2002年



33 「綿のぬくもり」 1995年



34 「リボン波」 1995年(左)／ 35 「小鳥」 1982年(中)／ 36 「初秋」 1981年(右)

38 「四葉クローバー」  
1983年

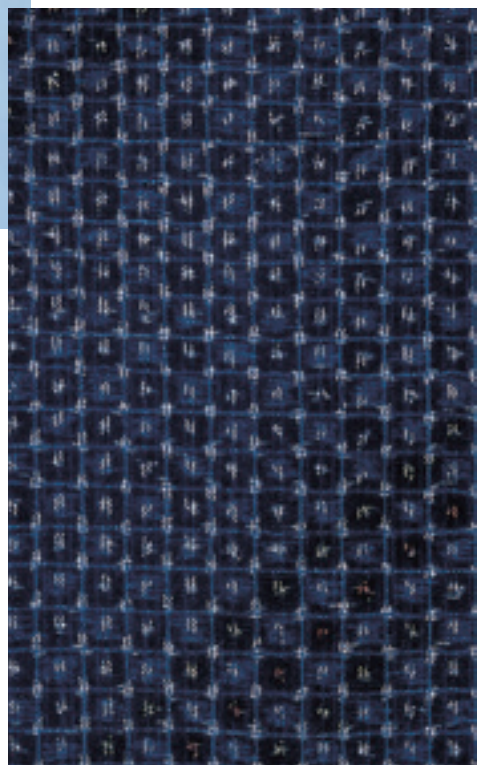


37 「梅花文」 1975年頃





39 「半円」 1992年(左)／ 40 「熨斗文」 1968年頃



41 「初秋」 2004年

42 「幾何文」 1975年(左) / 43 「変わり矢絣」 1983年



44 「H文」 1980年(左) / 45 「白地絣」 1991年



46 「桐」 1968年頃(左)／ 47 「梅花幾何文」 1972年頃(中)／ 48 「青海波入菱つなぎ」 1967年頃(右)



49 「麻の葉文 着物」江戸末期 倉吉





50 「文明開化 布団」  
明治時代 久留米



51 「虫の巣と松樹鷹文 布団」  
明治中期 倉吉



52 「牛若丸と弁慶文 布団」  
大正初期 広瀬



53 「松竹梅鶴亀文 布団」 明治10年 倉吉

## 絵 緋

木綿緋は250年前から西日本一帯に発展した。主な産地は、久留米、伊予、備後、山陰地方の広瀬、弓浜、倉吉緋と産地毎に特徴のある緋が生産された。

藩政時代は庶民は木綿の産地によって経済的基礎を作り、租税や年貢として織物を納める重要産物であった。また、愛する人への贈物や嫁入りの荷物として財産の分けまえなど、紺緋は庶民の着物として日常のすべての衣料に、暮らしの中で息づき発展した。「洗えば洗うほど美しくなる」という伝承は、手づくりの味と強靱な地質と正藍染めによって、親から孫へ三代は着用され、洗う度に藍色が冴えて美しくなったことを意味する。

緋の最盛期は、明治期から大正初期にかけて全国に風靡し、大量生産されて高度の秀作を生んだ。それらの作者は、貧しい庶民の女性たちであったことを、私は古老から聞き取りをし、その多様な遺品の精査によって多種類の絵緋を確かめた。調査を進めるほど衣生活の歴史の深さと、その作者の執念に驚嘆しながら、木綿緋と関わって50余年の歳月を過した。

山陰地方の倉吉緋は、明治20年代に最盛期になり国内や諸外国の万国博覧会に出品して受賞するほど優秀な絵緋が産出された。しかし、捺染、抜染の出現と、久留米、伊予、備後緋の日本三大緋の大資本を主力とする動力織機による安価な緋に圧迫されて、衰微の道を辿り、昭和初期には工場を閉鎖してしまった。最盛期は「町中が機音で地響きがした」と、古老は語っている。

昭和30年代に緋を学びはじめた私は、古布を集めて標本を作り、実際に絵緋を復元して理解を深めた。また、木綿と藍色について調べると、江戸時代（1628-1649年）に4度にわたる法度で、庶民の衣生活を木綿と藍色に規制し、厳しく取り締まっていたことがわかる。紺地の中に織り出す絵文様のみが自由に許されていた。絵柄によって反物の値段に格差をつけ、女たちの感性と技が競い合う中で、緋には厳重な秘密主義がとられていた。技術の伝承は親から子へと伝えられ、緋名人の母から娘をもらう（結婚）事が、家庭経済を助ける現金収入の唯一の道とされ、女の機織りの腕と働きで家を再興させてきた。

着物1枚（12メートル）分の糸を紡ぐため、夜なべを10日間続けて（750グラム）綿から糸を紡いだ。糸挽き3年、糸取り3年、機織り3年と口々に言って幼小から、等身の紡糸車に向わせ練習させた。指先から紡ぎ出す糸の太さと撚りの強さは、身体で覚える教育を徹底し、緋のデザインの発想も日々訓練した。こうした在野の女性たちの願いが緋文様に込められているのである。

緋文様には、吉祥や長寿、花鳥山水、宝物などが多く、それらの緋が語りかけてくる。子孫繁栄と安泰、平和を願う祈りが感じられる絵文様、正直な仕事の中に、愛する魂が宿っている。糸の上に豆を乗せる、数を数える代りに豆を動かしながら800本の経糸を整経する。明治や大正時代に生きた女性たちは、木綿を織る事によって、雑念からシャットアウトされ、神聖となった。そして織りの中にすべてを吐き出して家を納めていた。これは素晴らしい文化だと思う。

より美しい着物を家族のために、どんな辛気な作業も手を抜かず、日夜夢見た文様を再現した。

昭和40年代は高度経済成長の出現によって、木綿衣料は廃棄され家庭から一掃された。そして一瞬の間に農村も時代の推移と共に着物離れが進み、既成服姿に変わってしまった。

庶民の着用した木綿は、ボロボロになるまで着て、さらにボロを引き裂いて織る。このため何も残していない。幸いに私の所蔵した絵緋は数世紀生き続けると思う。

今年の夏、久しぶりに街を歩いた。空店舗が多くなり、シャッターを閉めていた。活気のない、病んでいる様子に驚いた。ふと路面に今迄見たことのない骨董屋が開店し、路上にはみ出して古着を積んでいた。抜き出して広げると重量感のある縞緋の綿入り男丹前である。表裏地とも手紡織りで新品に近いものである。半世紀前まで男性は紺緋木綿の綿入れ着で冬を越した。そのドテラが「パッチワーク用に小布にされる寸前に出逢えてよかった」と、私に語っている。奥から店員が出てきて「よければ500円です」と言った。私は無言のまま着物を抱いて店を出た。1日中陽日に干し、私の緋舎に辿り着いた資料として豆絵符（荷札）を付けた。久しぶりに古着物との出会いに感謝した。

今日までの私は、布を織り上げた沢山の老女たちとの邂逅によって人生を紡ぐ緯糸のようであったと思う。こうして農女たちの生きてきた経験と知恵を学ばせてもらい、感動することをスケッチして緋に織り続けている。

古老からの口伝は、法政大学出版局（ものと人間の文化史）「木綿口伝」「野良着」「緋」「染織」「木綿再生」の5部作に忍ばせておいた。

財団法人日本工芸会正会員・  
緋県伝統工芸士・倉吉緋保存会顧問  
鳥取県無形文化財保持者  
福井貞子

# 倉吉緋の制作工程

## 糸づくり

糸の原料となる綿をよく乾燥させ、綿の中の種を取り除く。綿を打ったものを薄く延ばし、丸い箸に巻きつけて箸を抜くと中に空洞のある20cmくらいの綿の棒ができる。これを篠巻という。篠巻を左手に持ち、糸車を右手で回して糸を紡ぐ。一反分の糸を作るのに必要な綿は約800グラム。紡いだ糸は総（おさげ）という輪の状態にして約40分間煮沸する。脂や不純物を取り除くとともに糸を強くし、撚りを安定させることができる。その後よく水洗いし、乾燥させる。



綿の実



糸紡ぎ

## デザイン・絵糸作り

緋は織りによって模様を出すため、糸に模様をつける必要がある。デザイン画を元に渋紙で型紙を作る。「絵図台（おさだい）（箴台ともいう）を使い種糸を作る。台の両端の箴羽（おさば）の上に模様の幅だけ白い糸を渡していく。1cmの幅におよそ20本の緯糸を載せ、その上に型紙を置いて墨で塗っていく。



デザイン画



型紙

## 緯糸作り

種糸を整形台に張り、その上に精練した白い糸を種糸に重ね、墨で印をつけた部分を麻の皮を割いた紐（アラソ）で括っていく。経糸にも模様を入れる場合、同じように括っておく。



種糸 (絵糸)



緋括り

## 藍染

助剤である木灰を作る。藍の葉を発酵・熟成させた薬（おさげ）4キロに対し、木灰20キロを液にしたもの、糖蜜200cc、消石灰250グラムを加えて藍液を作る。毎日朝晩50回づつ攪拌しながら発酵を待つ。途中（8日目くらい）試し染めを行ない、様子を見て本染めを行なう（14日目くらい）。染めて絞ったのち、空気酸化によって藍の色を定着させるため、石に打ちつけ空気を送り込む。水にさらすと発色がよくなる。

## 製織

整経が終わった約16メートルの長さの経糸800本を機に固定する。一方、染めて乾燥させた緋の糸の括りをほどいて灰汁だしをし、さらに乾燥させたものを1本ずつにわけ、管に巻いていく。この管を舟形をした（おさげ）容器に入れ、経糸の間をくぐらせて緋を織る。



製織



管巻 (福井かね)



整経

## 出品リスト

No.	作品名	制作年	技法・材質	出品・受賞
着物				
1	秋の渚	1981年	手紡緋	第29回日本伝統工芸展初入選
2	冬景	1996年	手紡緋	
3	砂丘の風紋	1997年	木綿緋・くちなし	第22回全国伝統的工芸展染織グランプリ
4	彩流	2000年	手紡緋・茶綿入	第37回日本伝統工芸染織展
5	浜辺	2003年	手紡緋・茶綿入	第46回日本伝統工芸中国支部展 特別賞「金重陶陽賞」
6	赤米の野	2006年	手紡緋・弁柄入	第53回日本伝統工芸展
7	列砂丘	2007年	茶綿手紡緋	第54回日本伝統工芸展
8	弁柄のさと その2	2007年	手紡緋・弁柄入	日本工芸会中国支部50周年記念展 鳥取県知事賞
9	山桃	2009年	手紡緋・茶綿弁柄入	第52回日本伝統工芸中国支部展
10	渚	2009年	茶綿入手紡緋	第56回日本伝統工芸展
11	夕焼	2009年	手紡緋・茜入	第43回日本伝統工芸染織展
12	湖畔	2010年	茶綿手紡緋	第57回日本伝統工芸展
着尺				
13	前進	1989年	手紡矢絰	
14	うず潮	1990年	木綿緋	
15	立涌と菊花	1986年	木綿緋	
16	経緋	1975年頃	手紡緋	
17	矢絰	1991年	手紡緋	
18	鶴	1970年	木綿緋	
19	親子亀	1972年頃	木綿緋	
20	水のほとり	1984年	手紡緋	
21	晩秋	1966年	手紡緋	
22	豆腐文	1985年	木綿緋	
23	飛鶴文	1994年	木綿縞入・やまもも	
24	紅葉と市松菱	1989年	手紡緋	
25	矢絰	1991年	手紡緋	
26	小緋	1996年	木綿緋・くちなし	
27	並んで	1983年	手紡緋・茶綿縞入	
28	希望	1986年	木綿緋	
29	小緋	2000年	木綿緋	
30	三角四角	2002年	木綿緋	
31	春風	1998年	木綿緋	
32	古代米の贈物	1991年	手紡緋・赤米	
33	綿のぬくもり	1995年	木綿緋	
34	リボン波	1995年	木綿緋	
35	小鳥	1982年	木綿緋	
36	初秋	1981年	木綿緋・くちなし	
37	梅花文	1975年頃	手紡緋	
38	四葉クローバー	1983年	木綿緋	
39	半円	1992年	木綿緋	
40	熨斗文	1968年頃	手紡緋	
41	初秋	2004年	手紡緋	第47回日本工芸会中国支部展無鑑査
42	幾何文	1975年	木綿緋	
43	変わり矢絰	1983年	木綿緋	
44	H文	1980年	木綿緋	
45	白地緋	1991年	木綿緋	
46	桐	1968年頃	木綿緋	
47	梅花幾何文	1972年頃	木綿緋	
48	青海波入菱つなぎ	1967年頃	木綿緋	
古布				
49	麻の葉文 着物	江戸末期	倉吉	
50	文明開化 布団	明治時代	久留米	206×168cm
51	虫の巣と松樹鷹文 布団	明治中期	倉吉	160×34cm
52	牛若丸と弁慶文 布団	大正初期	広瀬	154×34cm
53	松竹梅鶴亀文 布団	明治10年	倉吉	160×34cm
54	寿文字亀文 布団	明治中期	倉吉	160×34cm (図版なし)

## 略 歴

- 1932年 鳥取県東伯郡琴浦町（旧赤崎）に生まれる。旧姓高塚。
- 1952年 福井千秋と結婚。
- 1959年 倉吉絣を大姑福井かねに師事する。
- 1960年 鳥取県立保育専門学院実習助手を第一歩として、1961年9月倉吉北高等学校講師、1962年教諭。
- 1962年 日本女子大学通信教育部生活芸術科卒業。
- 1963年 倉吉市美術展 工芸の部入選（絵絣「のし」）。
- 1967年 倉吉絣資料展開催。あわせて高機実演（収集絣と新制作品。市内催場）。
- 1967～1970年 絣研究グループ発足。1970年に自宅に高機4台持ち帰り指導（土・日）。
- 1968年 宮本常一氏（武蔵野美大教授民俗学者）助手・町井夕美子氏、我家に泊り絣を勉強する（3ヶ月間）。倉吉美術展入賞 県美術展入賞。
- 1969～1981年 鳥取県絣見本市に出品（東京大丸）、問屋と学識者の指導を受ける。通算12回。
- 1970～1978年 日本家政学会民俗服飾調査委員（中国幹事担当）。
- 1971年 倉吉北高等学校に倉吉絣研究室を開設。  
倉吉市倉吉絣保存会設立、絣指導として参画。理事、副会長後倉吉絣保存会長（2002～2006年5月）現在顧問。  
日本家政学会民俗服飾調査（中部北陸・美濃紙、有松絞り伊勢型紙紙鞆銅装束）。
- 1972～1975年 日本家政学会民俗服飾調査（関東、結城紬他、九州方面久留米絣等）。
- 1972～1979年 大阪青山短期大学織物講師。  
1979年 倉吉絣資料館・私設開館（無料）。
- 1980～1985年 日本民芸館展初入選（男物着尺）後3回入選（経緯絣買上げ）。
- 1980年～ 第17回日本伝統工芸染織展初入選 後15回。
- 1982年～ 第29回日本伝統工芸展初入選「秋の渚」。後34、41、45、46、48、50、52、53、54、55、56、57、58回、計14回。
- 1987年 鳥取県伝統工芸士会倉吉絣伝統工芸士指定（第1号）。
- 1988年 倉吉北高等学校・倉吉絣研究室を退職。
- 1989年 元大阪市立大学教授中嶋朝子氏のギリシャ民族服調査に同行（5月～6月）。
- 1990年7月 倉吉絣展示会（鳥取県博物館）。33名、65点、代表を務める。
- 1991年 日本工芸会中国支部準会員。
- 1991年～ 日本工芸会中国支部展19回入選。
- 1992～1994年 NHK鳥取文化センター開校草木染講師。
- 1993年 倉吉絣個展（東京銀座豊美画廊）。  
第30回日本伝統工芸染織展 30回記念特別賞「漁火」（買上げ）。  
日本伝統的全国工芸展奨励賞。  
山陰工芸展奨励賞（松江市）木綿絣着物「清流」。
- 1993年～ 倉吉市財団法人伯耆しあわせの郷織物講師。
- 1995年 有色米染色法で発明特許第2024855号取得。共有・伊藤詳子（鳥取）。
- 1996年 日本工芸会中国支部展に木綿手紡絣着物を出品。鳥取県知事賞「五月雨」。
- 1997年 第22回全国伝統的工芸展 通産省生活局長賞、染織グランプリ「砂丘の風紋」。
- 1998年 日本工芸会正会員。日本工芸会中国支部染織部長（1997～2001）、幹事（1999～2002年）、審査員（1999～2009年）、特待者（2010年～）。  
倉吉市民栄誉賞。
- 1999年4～6月 「鳥取県の近代美術」I「絣の技と美」。個人蔵として作品を出品（鳥取県博物館）。
- 1999～2004年 鳥取県社会福祉協議会高齢者大学（民族・絣）講師。
- 2000年8月 「倉吉絣保存会30周年記念（故大橋次郎会長一周忌）展」（倉吉博物館）、グループ展、50人で60点。博物館で高機実演（事務局市商工課）。
- 2003年 第50回日本伝統工芸中国支部展特別賞 金重陶陽賞「浜辺」。
- 2004年 「江原道-鳥取県交流10周年記念 日韓手工芸品展示会」参加、絣着物2、着尺3点出品。高機製織実演、藍染め、久重早百合、鈴木峰子同伴。県知事他30名訪韓。
- 2005年 「第25回伝統文化ボーラ賞 地域賞「倉吉絣の再興・普及」」。
- 2005年11月 「現代の表現 鳥取vol.3 鳥田悦子・福井貞子-絣表現における伝統と創造」（鳥取博物館）、50点出品。
- 2006年 鳥取県絣無形文化財保持者認定。  
鳥取県文化功労賞。
- 2007年1月 「平成18年度鳥取県文化功労賞受賞記念巡回展」の染織部門に出品、テーマ「絣にみちびかれて」（鳥取博物館・倉吉博物館・米子美術館を巡回）。

- 2007年 鳥取県教育表彰。  
日本工芸会中国支部50周年記念展 鳥取県知事賞「杵柄のさと その2」。
- 2008年4月 「倉吉緋・ふるさとを織り継ぐ」倉吉緋保存会35周年（倉吉博物館）。
- 2008年10月 「郷土作家シリーズ～倉吉の美術100年展」（倉吉博物館）。手紡緋着物「杵柄のさと その2」招待出品。
- 2008～2009年 県立沖繩芸術大学非常勤講師。
- 2009年 日本女子大学家政学部賞。
- 2011年11月 平成23年度地域文化功労者文部科学大臣賞。

#### 著 書

- 1966年 『倉吉かすり』 米子プリント社 私家版
- 1973年 『図説 日本の緋文化史』 京都書院
- 1981年 『新訂 日本の緋文化史』 京都書院
- 1984年 『木綿口伝』 法政大学出版局
- 1985年3月 『倉吉緋余話』 桜文社 私家版
- 1988年3月 『倉吉緋研究室（17年の歩み）』 倉吉北高等学校緋研究室
- 1991年 『藍』 京都書院
- 1992年 『染織の文化史－木綿と藍－』 京都書院
- 2000年3月 『ものと人間の文化史93 木綿口伝』 法政大学出版局
- 2000年9月 『ものと人間の文化史95 野良着』 法政大学出版局
- 2002年4月 『ものと人間の文化史105 緋』 法政大学出版局
- 2004年12月 『ものと人間の文化史123 染織』 法政大学出版局
- 2009年9月 『ものと人間の文化史147 木綿再生』 法政大学出版局

#### 共 著

- 1991年 『仕事着』 西日本編（鳥取県担当）平凡社
- 1992年4月 中嶋朝子・福井貞子『ギリシアの民族衣装：技法調査を中心に』 源流社

#### 論文他

- 1970年8月 日本家政学会民俗服飾調査団を山陰・山陽へ案内（一行20名）
- 1974年 「倉吉緋の技法と文様」『染織と生活』6号 染織と生活社
- 1986年 「私が子どもに残したいもの「手織り木綿の技術」」『望星』東海教育研究所
- 1993年 「倉吉緋と共に歩んだ機織り35年の軌跡」月刊『染織α』1993年5月No.146 染織と生活社
- 1994年 「民芸のこころを守り伝えたい」『市報くらよし』10月 倉吉市発行
- 2000年 「女の思い連綿と紡ぐ」2000年10月31日 日本経済新聞文化欄全国版
- 2001年4月 「緋－そこに働く女の心が織り込まれた美がある」『別冊太陽』113号 平凡社
- 2002年 「織り出された女たちの生、木綿を収集して40年余」2002年7月16日夕刊、朝日新聞全国文化欄
- 2006年 「通信教育で学ぶことを生涯学習に連ねる」『女子大通信』6月特別号 690号  
「緋に導かれて」『月刊装道』3・4月号
- 2007年3月 平成18年度鳥取県小学校長教育研究大会 講演「緋に導かれて」『伽羅木』第40号
- 2007年 「機音の響いたまち」『倉吉緋 ふるさとを織り継ぐ』
- 2010年10月 「受賞が導いてくれたその後の活動」『伝統と文化』No.34
- 2010年 「私の人生に影響を与えた一冊」姜尚中著『母－オモニ－』の読書感想文 日本海新聞2010年10月26日付「楽団」に掲載、その他地方紙掲載文多数

#### 講 演・報 告

- 1965年 日本家政学会第17回「倉吉緋の模様の変遷と特長」東京女子大学10月朝日新聞掲載
- 1966年 日本家政学会第18回「山陰地方の緋の起源とその模様」大阪市立大学 絵緋の美
- 1966年6月 伯耆文化研究会例会にて研究発表「倉吉がすりについて」（米子市立図書館）
- 1966年11月 「山陰地方の緋の起源（第2報）」『女子大通信』214号
- 1967年 日本家政学会第19回「久留米緋の模様の変遷と特長」東京家政学院大学
- 1967年5月 倉吉ロータリークラブ「倉吉緋」（商工会議所例会）
- 1968年 日本家政学会第20回「被服にとり入れた紋章調査（第1報）」文化女子大学
- 1969年 日本家政学会第21回「被服にとり入れた紋章調査（第2報）」日本女子大学
- 1971年 日本家政学会第23回「被服にとり入れた紋章調査（第3報）」昭和女子大学
- 1972年 日本家政学会第24回「木綿緋の文様について」実践女子大学
- 1985年4月 「倉吉かすり」国際ソプロチミスト倉吉例会
- 1998年8月3日 「倉吉緋の歴史」伯耆しあわせの郷にて倉吉初等教育研究会先生方一同に話す

- 2003年3月6日 「女の技かすり」長寿社会文化協会（WAC）友の会（池袋メトロポリタンプラザビル内全国伝統的工芸品センター研修室）
- 2003年12月 第50回日本伝統工芸展松江展（鳥根県文化振興財団、朝日新聞社など主催、鳥根県立美術館）にて、子ども体験・ギャラリートーク他・染織
- 2004年9月12日 公開講演会「絣（かすり）」（鳥取民藝美術館）
- 2006年10月3日 2006年度鳥取県小学校長研究大会 講演「絣に導かれて」（北条農村環境改善センター）
- 2007年 「機音の響いたまち」（「特別展 倉吉絣 ふるさを織り継ぐ（倉吉絣保存会35周年記念事業）」、倉吉博物館）
- 2011年4月 「木綿絣に導かれた人生」愛知県・手紡ぎ木綿研究会・中部デザイン協会主催「コットンデザイン展」（名古屋市）
- 2011年6月 「山陰の女性と織物」安来市文化協会主催（広瀬町）



日本女子大学自敬寮4年次(スクーリング) 1962年8月  
2列目中央 寮監安東幸子、前列右から5人目 福井貞子





発行／日本女子大学成瀬記念館  
〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1  
Tel 03 (5981) 3376  
写真／池本 喜巳  
制作・印刷／瞬報社写真印刷株式会社

